



堂々と聳え立つ屋久杉を前に、その威容に圧倒され、ため息をつく人もいれば、夢中でシャッターを切る人もいます（写真1）。よく見ると幹には何やら穴が開いています。思わずお賽銭を投げる人もいますが、もちろんお賽銭箱ではありません。これは江戸時代の試し切りの跡といわれています。江戸時代、平木という短冊状の薄板が年貢の単位であった屋久島では、平木を取ることができる、木目の真っ直ぐな木を選んで切り倒していました。その木目を確認するために一部木材を切り取った跡が試し切りの穴だったのです。ということは試し切りの跡があるにもかかわらず、ここ



写真1 奉行杉とためし切りの跡

に生き残った屋久杉は、江戸時代、平木が取れそうもないダメ杉だったということになります。こいつは切っても役に立ちませんよとレッテルを貼られたようなものです。そこにお賽銭を投げ入れて、果たしてご利益があるのかどうかはわかりませんが、こうして生き残ったおかげで、立派な名前がつけられ、「おおつ」といって多くの方に見上げられるわけですから、『若い頃出来が悪いといわれたからといって、あきらめてはいけない。長生きはするものだ。』という見本のような木が屋久杉なのです。

## 1 エコツアーとは

屋久杉を前に、ただただため息をつき、シャッターを切るだけでもよいのですが、少しエコツアーガイドの解説が加われば、物言わぬ屋久杉が語りはじめます。樹齢が1,000年を超える屋久杉は、われわれの大先輩であり、学びの宝庫です。一つひとつの事象の裏を読み解き、そこから人生の学びを引き出す、それがエコツアーガイドのインタープリテーション(自然のことばを翻訳して伝える)です(写真2)。



写真2 インタープリテーション中の私

エコツアーとは、『エコツーリズムの考えに基づいて実践されるツアーの一形態で、地域への関心を深く理解を高めてもらう手段として、地域・自然・文化と旅行者の仲介者(インタープリテーションの能力を持ったガイド)が存在することが望ましい』(日本エコツーリズム協会による定義を抜粋)と

されています。つまりエコツアーガイドの存在がエコツアーの要ということになります。

## 2 なぜエコツアーガイドが必要か？

エコツーリズムの基本は、自然に負荷をかけない持続可能な旅行を楽しむということなのです。そのために旅行者をコントロールし、旅行の場となる自然の環境を保全するのもエコツアーガイドの重要な役割です。

自然の中でガイドによるインタープリテーションを楽しむためには、昔のような団体旅行とはいけません。少人数でじっくりと自然を見る旅行スタイルが、人数による自然への負荷を軽減します。同時にエコツアーガイドが日常的にフィールドに滞在することにより、盗掘やごみの投棄といったマナー違反に目を配ることができ、またごみ拾いなどを行うことによって、良好な環境が維持されています。

エコツーリズムのもう一つの柱に、持続可能な旅行による地域経済への貢献があります。あつという間に素通りしてしまう場所もインタープリテーションを行うことにより、滞在時間を何倍にも延ばすことができます。そうすることにより観光地の価値を高め、地域での滞在時間を長くし、しいては旅行者の地域経済への貢献度を高めることができます。また限られた日数で地域の観光ポイントをすべてまわりきることができれば、それがリピーターを生むこととなり、安定的な旅行者の確保に貢献することもできます。

### 3 エコツアーはエンターテインメントでなければならない!

もう一つ忘れてはならない重要なポイントが自然環境保全への啓蒙です。私は以前環境庁に勤めていて、政府が準備計画した自然観察会を見てきました。しかし環境庁の自然観察会に参加する人は、既に自然保護への関心が高い人ばかりで、無関心な人を呼び込むには少しハードルが高いという経験がありました。ところがエコツアーは旅行の一形態であり、自然保護に関心の高い人だけが集まるものではありません。そこにさまざまな出会いが生まれるわけです。

そこで重要なことは、説教くさい自然観察会では集客することはできないということです。面白くてためになるエンターテインメントだからこそ、すべての旅行者に満足いただき、自然環境保全に関心を抱いてもらうことができる、それがエコツアーガイドの最も重要な役割だと思います。

### 4 エコツアーの負荷

エコツアーに参加すれば、自然への負荷がまったくないかというと、そういうわけにはいきません。遊歩道が樹木の根で支えられている屋久島では(写真3)、人が歩けばどうしても根を



写真3 根で支えられる登山道





図1 協力金のチラシ

踏みことになります。樹木は、繰り返し繰り返し根を踏まれると、その部分は根が枯死して、やがて弱ってきます。

また人が歩くとそこが窪み、水の通り道になってしまいます。そうすると雨のたびに水でえぐられ、樹木の根が浮いてしまい、場合によっては下がえぐられ倒れてしまうこともあります。

しかしこうした負荷を一切かけずに自然に入ることは、本来はできません。かといって、だから自然の中に入らないほうがよいかというとそういうわけでもありません。人が自然の中に入り、感じ感動したことは、バーチャル世界では味わうことのできない、五感を震わせる体験です。そこで得たものが単に素晴らしい自然地域の保護だけでは

なく、自らの日常生活の中で環境への負荷を考える大きな契機となることを考えれば、人は自然の中に入るべきだと考えます。

要は自然への負荷が不可逆的に自然を破壊するものではなく、自然の営みの中で修復可能な範囲で収まるようにコントロールすればよいのです。

## 5 エコツーリズムで自然を守る！

少人数制のエコツアーで、利用人数をコントロールすることも、自然への負荷を制限することになっていることは先に述べたとおりです。またどんなに気を使っても、自然の中に人が入れれば何らかの負荷がかかることを気づかせてくれるのもエコツアーガイド

の重要な役割です。

一方で、それだけでは防ぎきれない負荷に対しては、登山道整備などにより、自然を守らなければなりません。そうしたコストもツアーの中から負担していこうというのがエコツーリズムの考えです。

自然地域の観光で得た収入をその自然地域の保護に当てるとというのがエコツーリズムの重要な柱の一つです。しかしこれまで屋久島ではそうしたシステムが存在していませんでした。エコツーリズムの先進地と謳われてきた屋久島ですが、実際には個々の事業者の努力で成り立っていただけでした。

そこで今回、屋久島町が計画した新たな協力金制度に対して、地元の観光協会からの提案で、新たな環境保全のためのシステムがスタートしようとしています。屋久島に来た旅行者に対して環境保全のための協力金へのカンパをお願いします(p.59、図1)。それに対して図2のようなバッジを供与して、エコツアーガイド業者などが、バッジを有する旅行者に対して割引などの特典を与えるというシステムです。つまり最初は旅行者が協力金という形でお金を支払うのですが、島内でツアーに参加するなどの買い物をしていくことにより、さまざまな特典で元が取れるという仕組みです。たとえば1,000円の協力金に対して、エコツアーガイドがツアー代金を500円割引けば、旅行者とエコツアーガイドで環境保全のためのコストを折半しようということになります。結果として観光で得られた



図2 バッジ

収入が環境保全のためのお金として還元されていくこととなります。

これに対して、地元の町がエコツーリズムの店の認定を行い、地元の業者もメリットが得られるようになれば、旅行者－観光業者－行政が三位一体となって、屋久島の自然を守りながら地域の経済を盛り上げていくという、真の意味でのエコツーリズムの島という制度が確立されることとなります。

こうした協力金を使って登山道の維持管理等を行えば、不可逆的に自然が破壊されることを防いでいくことができるはずです。

## 6 エコツーリズムは入島時に始まる

ありがたいことに世界遺産という称号とエコツーリズムの浸透により、屋久島の山岳部でごみを見ることはほとんどありません。以前は山に行けばごみ袋一杯ごみが拾えたことを考えると隔世の感があります。

しかしエコツーリズムという観点

からもう少し踏み込んで考えてみると、山にごみがなくなれば、島の環境保全はそれでよいかというと、それほど簡単ではありません。

ごみのリサイクルを考えてみると、アルミ缶は業者が買い取ってくれるから、所定の場所に捨てれば問題ないと思われがちです。しかし島内に処理業者のいない屋久島では、それを島外まで船で運ぶ運賃を島で負担しなければなりません。アルミ缶を安く買い叩かれると赤字になってしまうので、屋久島ではきれいに洗ってからごみに出すようになっています。こうしてきれいに洗われた屋久島のアルミ缶は最高値で買い取ってもらうことができるので、何とかリサイクルがまわっています(写真4)。リサイクルが義務づけられているものでも、実はリサイクルにかかるコストは地域によって異なっていることは、意外と知られていません。

それを考えると外から買ってきたアルミ缶やペットボトルなどを島内に持ち込み廃棄するというのはもってのほかということになります。必要なものは島内で買い物して、リサイクルコストの一端を負担するというのもエコツーリズムの重要なポイントということになります。

## 7 エコツアーを楽しもう

ともあれエコツアーは決して難しいものではありません。自然の多様性を活かし、さまざまなアクティビティを通して自然を楽しむエンターテイメントです。

要は出し惜しみせず心行くまで楽しんで帰ることが、エコツーリズムだと思っただけならば幸いです。そのためのプログラムがエコツアーとして用意されています。さあエコツアーを楽しみましょう！(写真5)

(廃棄物資源循環学会誌 第26巻 第3号 pp.183-190 (2015) に関連記事掲載)



写真4 空き缶は洗って捨てましょう



写真5 エコツアーを楽しもう